

ほかに ワンセグ・高瀬の 番組チェック



文：高瀬徹朗 *Takase Tetsuro*

本誌放送アナリスト・ワンセグウォッチャー

2011年7月24日が、ついに訪れた。長かったような、短かったような……と、遠巻きに見守ってきた私ですら思うのだから、関係者たるやさぞ万感の思いだろう。最後の最後で被災3県の延長という状況には見舞われたが、それでも総務省、NHK、民放各社ら皆さんの努力が無に帰したというわけではない。被災地の復興を心より願いつつ、あらためて完全デジタル放送がなされるその日を待ちたいと思う。それではチェック、スタート。

● NHK固定データ放送 「NOD接続仕様」にリニューアル ● ワンセグはスマートフォンで新たな可能性

データ放送から 通信系動画表示

今年4月、NHKの固定向け非連動データ放送が大きくリニューアルされた。細かなメニュー配置換えやデザイン変更は置いておいて、とりあえず注目すべきは色ボタン黄色が与えられたメニュー「NHKオンデマンド」である。

NHKオンデマンドとは、言わずと知れたNHK公式の通信経由映像配信サービス。PCインターネット上のほかアクビラ、JCOMオンデマンドといったIPTV系プラットフォームを経由することで視聴することもできる。

さて、その気になる黄色ボタンを選択してみると、まずは当日の「見逃し番組」一覧表示画面へ遷移。このページで表示されるのはリストだけで、それぞれのコンテンツを選択することはできないようだ。ここから赤ボタンを選択すると「NHKオンデマンドへ遷移します」とあるので、赤ボタンを選択。

今度はテレビ画面が消え、NHKオンデマンドのリスト表示に遷移した。当然、メニュー選択も可能。試しに「らくらくデジタル塾第7回」を選んで進むと、作品概要および購入案内などのページへ。購入誘導では、単品購入のほか「月額見放題パック」(945円)への加入も進めている。さらに下部では、お勧め作品として2コンテンツほど表示されている。

恐る恐る単品での購入を選択すると、決済方法の選択画面へ。このひとつに「キャンペーンポイント利用」(アクビラのポイント利用サービス。1ポイント=1円で利用可能)があることで、初めて自分自身がアクビラのプラットフォームへ進んでいたことに気がついた。

そう、つまりこの新機能は、BMLのデータ放送画面からアクビラ(JCOMオンデマンド契約者ならばおそらくJCOM)サービスブラッ

トフォームに直接進めるというもの。いま試したやり方は比較的わかりやすい連携だが、もっと大胆な利用も展開している。

トップメニュー「NHKデータオンライン」から、大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」を選択。ここでの遷移先は通常の連動データ放送画面だが、ここで「次回予告」を選択すると突然、テレビ画面を閉じて予告動画再生が始まる。

再生終了後に表示される画面は「NHKハイビジョン動画クリップ」。お勧め番組や大河などの短編PR動画を視聴できるページだ。こちらはプラットフォームとしてNOD(アクビラ等)を借りている可能性は高いが、画面表示上では通常のデータ放送画面と大きな変わりはない。本線表示がないことを考えると、BMLに似せて作成したHTMLページだろうか。

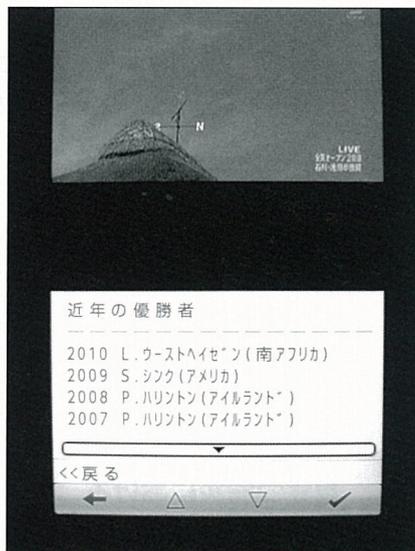
いずれのサービスにおいても、難点は「テレビ画面に戻れない」こと。悪戦苦闘の結果、テレビ電源を一度落とすと戻れることがわかったが、これはあまりに不親切な設計だろう。

とはいえ、アナログ放送が終了しようかという時期によく登場した「本格的放送・通信の融合」。課題の解消を含め、今後の発展に期待したい。

スマートフォンの 「思わぬ」利点

テレビ朝日が7月14日から連日放送した「第140回全英オープンゴルフ」。ワンセグ連動データ放送付きということで、久々にチェックしてみた。

コンテンツメニューは「ペアリング」「スコア速報」「注目選手」「大会の歴史」の4点だけで、最も汎用性の高い速報はお約束どおり、テレ朝お得意の「テレ朝スポーツ」(ケータイサイト)への誘導窓口。ここまでなら特筆すべき点はないが、ふと、気が付いたことがある。



スマートフォンのテレビ朝日「第140回全英オープンゴルフ」の一画面

残る3つのメニューは、いずれもテキストデータが縦に並ぶ(「注目選手」は一覧から選手名を選ぶと写真データ付き選手プロフィール画面へ遷移)デザインで、従来のケータイ操作では十文字キー下クリックが面倒な仕様。ところがスマートフォンならば、タッチで下方向に送るだけ。つまり、スクロールの手間が驚くほど軽減されるのだ。

各選択可能メニューの文字サイズがタッチ操作で選びにくい大きさであること、また主要コンテンツをコンパクトHTMLサイトに委ねていることなどから、現時点でスマートフォンに最適化された仕様になっているとは思えない(これは各局同様)。しかし、課題となりがちな操作性の面で、スマートフォン普及が思わぬ効果をもたらす可能性は感じさせた。